
帰る道

雑草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰る道

【Nコード】

N6577L

【作者名】

雑草

【あらすじ】

誰しもが、帰る道を持っている。そして、それを見失ってしまったものも――。

学生時代、初めて書いたショートストーリーを、今の自分なりに加筆しました。黄昏に交わるいくつかの世界。少々ファンタジー風味です。

「1 - 1」

「プロローグ」

「——どうしたの？お兄さん」

赤く乾ききつた世界でその声はやけに鮮明に響いて、その瞬間世界が時を取り戻したかのようだった。

逆光の中伸びた小さな影が、こちらを覗き込むように首を傾ける。影の中に浮かぶ深青の目は、待ち焦がれた暖かな夜のように身体に染み込み、そしてゆっくりと伸ばされた小さな手と共に、静かな闇が訪れた。

「1 - 1」

授業の終了を告げる鐘の音がなり、高里桂介は開いていた本を閉じて顔を上げた。たかさとしけいすけ

まだ教師がいるというのに、一気に授業中の緊張を失いざわめきに満たされた教室を一瞥して、窓の外を見遣る。今日の授業はこれで全て終了したはずだった。しかし時間はまだ六時前。夏に差し掛かった空は『夕方』と言うには青い色を残している。

今から帰れば確実に明るいうちに帰れるだろう。しかし家までの三十分という時間を考えると――そこまで考えて桂介は小さく溜息を吐いた。と、いきなり後ろからやってきた衝撃でたたか机に胸をぶつけ、思わず舌打ちを漏らす。

「……っ痛え」

「どうしたー？今日は図書室か？」

そう言っただけで後ろから抱きついたまま馴れ馴れしく桂介を覗き込んできたのはクラスメイトの崎谷要さきやかなめだった。

要は桂介を「幼馴染」だと触れ回っていたが、桂介には全く覚えがなかった。それもそのはず、要がこの町に越してきたのは三ヶ月前――高校入学の時で、それ以前はずっと海外にいたというのだから覚えがなくて当たり前のことである。しかし入学以来絶えず纏わり付かれていたせいか、今では桂介と共に小中高と進学してきた友人達でさえ彼ら二人を「よくわからないが幼馴染なのだろう」と認識しているようだった。

「抱きつくなくなっただけで、暑苦しい」

そう言っただけで、先ほどから頬にひらひらと当たってくる要の中途半端に長い髪をお返しとばかりに引っぱ張った。肩口ほどでバラバラと乱雑に切られた髪は女性の髪のようにサラサラしていたが、この初夏の頃合にはうっとうしい以外の何物でもない。

「これも、せめて結べよ、暑苦しい」

再度暑苦しいと眉を顰めて言った桂介に、要はやっと身体を離して自分の髪を摘んで見せた。

「クーラーが効いてるからちょうどいいじゃん」

「そういう問題じゃない」

感覚の問題だ、と桂介は先ほどより深い溜息をついて頭を振った。教室にはクーラーが設置されているとはいえ、この不況の折、経費節減という名目で設定された温度は二十八度。外気温ほどではないにせよ、鈍く汗は染み出してくるし、閉められた窓からは近くの荒れ果てた雑木林からのくぐもった蝉の合唱が聞こえてくる。

蝉の声というのはそれだけで汗を誘うものだ、と、中学時代の担任が苦笑しながら言っていたのを思い出す。それと同じで、夏場に見る長い髪というのは、見ているだけで暑苦しく感じられるものだった。

「はいはい、結べばいいんでしょ、結べば」

そう言つて要は器用に輪ゴムで後ろ髪を縛り始めた。

その間に、桂介は帰りの仕度を整える。こんな晴れた日にホームルームに出る気はさらさらなかった。

「今日は何時？」

仕度を終え、席を立った桂介に要が訊ねた。

「七時過ぎ」

「じゃあ、その頃迎えに行くから」

「ああ」

じゃあいつてらっしゃい、と笑顔で手を振る要に手を上げて答えながら、桂介はクラスメイト達よりも一足早く教室を出た。

——いつのころからだっただろう、桂介が夕日を避けるようになったのは。

昼間とは違う大きな太陽が、揺らめきながら空を、建物を、人々

を、赤一色に染めていく。

その明るさにも関わらず、すれ違う人の顔すらわからなくなり、音が遠ざかり、世界が渴きで満たされる。赤い世界と共にただ一人取り残される静寂の時間——黄昏。

幼い日々、その世界から逃れるために柄にもなく必死で考えを巡らせたことを思い出して、桂介は思わず口を歪めて小さく笑った。真面目に学校へ通い、学校でやりたいことがあると言えば、遅くまで家を空ける両親も、生徒を尊重する教師も、遅くまで学校に残ることを許してくれた。持ち前の器用さで他人に対する明るさと社交性を身につけてからは、自然とクラスメイト達とは良好な関係を築けたし、放課後慌てたように立ち去る彼に「付き合いが悪い」と笑って背中を叩く者はいたが、刺さるような視線を送る人間はいなかった。遊び盛りの年代の時でも、昼間に充分身体を動かしていたからか、放課後に室内で過ごすとうと特に支障も不満も感じることはなかった。

ただ、必然的に日照時間の長くなる夏場は帰りが遅くなることになる。そういう場合、南向きで日当たりのいい教室ではなく、陽があたらないように工夫された図書室の奥に入り浸るようになったのは当然のこととも言えた。

建物の影になって涼しい風が吹き抜ける渡り廊下を渡りながら、桂介は視線を上げた。

（——今日はよく晴れたな）

七月に入ったものの、季節はまだ梅雨。『いこほ 微雨』という名前の由来どおり昨日までは微がなくなる暇もないほど降り続いていた雨だったが、今日はそれが嘘のように晴れ渡っていた。

青い空は人々にも世界にも生氣をもたらず。ホームルームが始まった教室からは、いつもより無駄にテンションが高くなったようなざわめきが漏れてきていた。

その声を聞くとともにしに聞きながら、桂介は慣れた足取りで図書館へと足を向けた。

「1 - 2」

「1 - 2」

図書館は建物と建物に挟まれるようにしてひっそりと佇んでいた。独立した建物でありながら、小ぶりな平屋でしかない図書館は、『図書館』と呼ぶにはあまりにも質素で静かだった。

図書館として建てられたにもかかわらず、つい昨年まで食堂として使われていたその建物は、改装されて図書館となつてからも、それまで校舎棟あつた図書室を利用してきた学生たちから変わらず『図書室』と呼ばれ慣れ親しまれていた。そういった事情を知らない新入生達にも『図書室』という名前が定着したのは、『図書館』にとつていいことだったのか悪いことだったのか。少なくとも新しく静かな部屋は、話したことがなくともお互い見知った顔ぶれの常連達には落ち着ける空間を提供していた。

「お、来たね、こんにちは」

扉を開けて入ってきた桂介に声をかけてきたのはカウンターに座っている角川直澄である。かどがわなおすみ

二年だという話だが、無駄に落ち着きを備えたその表情は新人教師と言われても納得出来たかもしれない。

「どうも」

桂介は笑顔で会釈をした。

放課後にしか図書館に顔を出さない桂介だが、たまたま通りがかった時に窓から覗くと朝だろうが昼だろうが角川の姿をカウンターに見ることが出来た。その姿からいつの間にか生徒達に与えられた異名は『図書室の番人』——何故か本探しだけではなく、進路相談や人生相談、果ては教師達からの本年度の各種大学試験出題傾向などという相談まで行っているらしいと聞くから驚きである。

いつも図書館で見ることが出来るのに、授業にはきちんと出ていくというから、実は双子なのだ否ドッペルゲンガーなのだ、遂には教師が怪しげな依頼の代わりに単位を与えているのだ等々、様々な噂が影で囁かれていたが、どれもありえないと言い切れないのが角川の恐ろしいところだった。いつの間にか学校の七不思議とまで言われるようになった角川を見ながら、桂介は笑顔で訊ねた。

「司書室空いてます？」

そんな桂介に、角川も笑顔でカウンターの仕切りを引いた。

「空いてるよ。今日はもう予定はないから好きに使っていい」

そう言うのは、例の『相談』をその司書室を使って行うからだっただ。図書室の奥、カウンターのさらに奥に仕切って作られた司書室は、意外な事に防音に優れたものだったから、色々な人間に重宝されていた。

「じゃあ、お借りします。何かあったら呼んでください」

そう言うて軽く頭を下げ、桂介は司書室に入った。

司書室は六畳ほどの広さがあったが、大量の資料と棚に埋め尽くされて実質三畳ほどの広さしかない。その貴重なスペースも、机と椅子によつてほぼ埋め尽くされていた。申し訳程度に設けられた小さな窓はとうの昔にその存在をなくしていたから、桂介はこの場所を初めて見つけた時は、驚きと共にかなりの幸運を感じたものだった。

ただ、角川が『依頼人』と共に使用している時は、図書室の奥に設置された小さな読書スペースで本を読んだ。本を日焼けから守るためにいつもブラインドが落とされているため、その小さい読書スペースでも全く問題はなかった。しかし、いつの間にか角川に資料の片付けを頼まれるようになり、そうしているうちに仕事がなくて司書室が空いている時は司書室のほうへ足を向けるのが日課となっていた。

思えば、と桂介は首を捻った。角川は静かに本を読みに来る他の常連にはわざわざ仕事を頼むことはしない——本を読みに来る人間

は大抵喋りかけられることを好まないからだ。昼休みなどにカウンターを溜まり場にするグループとは楽しげに話をしていたが、貸し出し業務の手伝いしかさせていないようだった。それなのに、放課後来るだけの桂介に仕事を頼んだのは、何か事情を知っているのか、それともただ単に目に付いただけだったのか。聞いても怪しげな笑みが返ってくるだけのような気がして、あえて訊ねるのは躊躇われた。

（まあいいか）

そう結論付けて、桂介は一番手前の椅子を引いて鞆を放る。とりあえず角川に悪意があるわけではなさそうだし、生きた『学校の七不思議』に対してあれこれ頭を悩ませたところで無駄なことだろう。そう思いながら鞆から先ほども読んでいた本を取り出して開いた。

「今日は相方は？」

開いていた司書室の扉の向こうから、カウンターに座ってこちらを向いた角川が声をかけてきた。

その言葉に、桂介は苦虫を噛み潰したような顔になった。ここで言う相方というのはもちろん要のことである。しかし、本当にいつの間に角川までそんな認識をするようになったのか。確かに気のいいやつではあるし、非常に気が合う友人だとは感じるが、初めて会った三ヶ月前から無駄に馴れ馴れしく付きまとわれっぱなしの桂介としてはどうにも釈然としないものがあつた。

「迎えに来るのかい？」

苦々しい顔をしたまま返事をしない桂介を面白そうに見やりながら、角川は再度訊ねた。

「はい」

そう、要は最初からやけに桂介と一緒に居たがつた。その為、いつもなら逃げるように教室から消える予定の放課後だったのが、四月早々から押し切られるように一緒に帰宅するようになったのだった。要が剣道部に入つた五月中旬からは「部活が終わるまで待っていてくれ！」という要の必死の懇願に折れて待つようになった。何

故そこまでこだわること疑問ではあったが、ああ見えて頭の回転の速い要との会話は案外楽しいもので、意外なほどに素直に桂介の生活に馴染んでいった。梅雨時期は室内にいる必要のない桂介が武道館まで足を運んで、終了間際の練習を見ながら隅で本を読んで待つこともあった。

晴れた日は要が図書館まで迎えに行き、曇りや雨の日は桂介が武道館まで足を運ぶ——これがいつの間にか二人の間で決められた暗黙の了解となっていた。

そういえば、と桂介は思う。小学に上がった時にはもう放課後は一人室内で過ごすのが定番となっていたから、誰かと帰るというのは初めてだったかもしれない。

人当たりのいい桂介だったから友人は多かったが、そういうこともあってどこか人に一線を引いていた気がする。要は初対面のくせにやけに嬉しそうに付きまといてきて、そういう関係が桂介には嬉しくも困惑した感覚を呼び起こさせるのだった。

（あいつはあいつで、謎の多いやつだよなあ）

彼方を見上げて息を吐いた桂介に、角川はちらりとした笑みを浮かべた。

「じゃあ、私は帰るから」

そう言う角川の声に、本に没頭していた桂介は驚いて顔を上げた。時間はまだ六時半。遠くのブラインドからは赤い光がかすかに漏れている。

角川が帰宅するのはいつも桂介よりも後だった。つまり、日が沈んだ後である。

時たまふらりとどこかへ消えることがあり、そういう時は桂介がカウンターを頼まれたりもしたが、自分より先に帰宅する角川を桂介は見たことがなかった。

「……どうかしたんですか？」

だから、思わずこういう言葉が出たのも仕方がなかった。目を丸

くする桂介に、角川は小さく笑ってみせた。

「ちよつと今日は用事があってね。こちらには戻ってこれそうにな
いから」

だから、戸締りを頼んでいいかな？そう言つて、ポケットから鍵
を取り出して桂介に放る。

「もう窓は閉めたし、閉館の札も掛けておいたから、後は入り口の
施錠だけでいいんだが」

「……わかりました。あ、でも、朝はどうするんです？」

渡された鍵を指しながら眉を寄せた桂介に、角川はポケットから
もう一本の鍵を取り出して見せた。

「合鍵があるから。それは明日返してくればいい」

「わかりました」

「じゃあ、また明日」

そう言つてカウンターを出る角川に、はい、と桂介は答えた。

「珍しいこともあるもんだ」

図書館を出た角川を遠目で見送りながら、桂介は思わず声に出し
て呟いていた。

確かに自分はまだ入学して数ヶ月しか経っていない。他人の習慣
など知っているはずはなかった。しかし角川がまさか帰宅するとは思
つてもいなかった自分自身に、少し笑いがこみ上げてくる。

（まあ、先輩も人間には違いないからな）

図書館に泊り込んでいるわけでもあるまいし、と、自分の考えに
またこみ上がってきた笑いを慌てて噛み殺した。ひとしきり笑いの
発作に耐えた後、時計を見るとすでに角川が出て行つてから五分以
上も経っていた。

あと三十分も経てば日没である。剣道部の練習は大体七時までだ
から、要が迎えに来るまでまた本でも読んでおくかと司書室に踵を
返した、その時――。

ドン！という鈍い音と共に建物が震えるのを感じた。

「2 - 1」

——気がついたら、ただただ呆然と立ち尽くしていた。
行くべき道を共に歩むものも、帰るべき道を示してくれるものも、
もう居なかった。

「2 - 1」

「つつ……」

唐突に訪れた爆音と振動に、桂介はバランスを崩して勢いよく棚に身体をぶつけた。

キィィと耳鳴りがするのは気のせいではないだろう。乱雑に積まれた司書室の資料は見事なまでに崩れ落ち、床の色を白一色に変えていた。

「……な、に」

傷む頭を抑えて立ち上がり、フラフラと司書室を出る。

「……な」

そこに広がる悲惨な光景に、桂介は思わず声を失った。
改装されたばかりの図書館は、すでにその真新しい姿を失っていた。床に散らばる沢山の本とガラスの欠片。隣の本棚に寄りかかり、
かろうじて立っている本棚。

北側の窓は全て無残に割れ、取れかかったブラインドを風が荒く

はためかせていた——そしてそこから覗く赤い光に、桂介は目を逸らせることも出来ず立ち尽くした。

(……夕日、じゃない)

回らない頭を叱咤して思考を紡ぐ。

(あつちは北側だ。ここまで激しい光が届くはずはない……)

じゃあ、と、そこまで考えた時、また風が荒く吹き、持ち上げられたブラインドがこらえきれずに音を立てて床に落ちた。

(——火？火だ)

太陽と同じ性質、同じ色でありながら、全く違う存在。暖かさを与えながら、小さいものでも本能的な恐怖を抑えきれない現象。

それが、窓の外に巨大な影を落としながら轟々と音を立てて立ち上っていた。

南と北、二つの校舎棟に挟まれた図書館。割れた窓の向こう、北校舎の一階、西の最奥で今もお炎を上げ続けているのは。

(理科室だ)

ということとは、何か薬品にでも引火したのだろうか。

もう時間も遅い。北棟は一、二年の教室しかないから、この時間に残っている人間はいないはずだった。北棟のさらに北側は広い駐車スペースになっているから、その奥にある部活動が行われている体育館や武道館にもそこまで被害がないはずだ。近くにある図書館でさえ建物が崩れるほどではなかったのだから。しかし、理科室のすぐ隣、理科準備室には担任の教師がよく居残っていたから、それが気掛かりだった——見たところ準備室の窓からは炎は出ていない。無事ならばいいのだが。

回りだした頭はぐるぐると思考を紡ぎ続ける。たとえ生徒が残っていたとしても、理科室に入る人間がいるとは思えない。ならば何故——。

窓の外でざわめきが徐々に広がっていくのを感じながら、それでもなお桂介は動くことが出来なかった。

出なければ、と思う。校舎と図書館の間に今年の春植えられたば

かりの若木が、くすぶりながらも倒れて図書館に寄りかかっているのが見えた。理科室から立ち上る炎も煙も、弱まる気配を見せずどんどん勢いを増しているように見える。距離があるのに、肌に当たる空気もチリチリと熱くなっているようだった。

本に飛び火したら、あつという間に全て燃えてしまうだろう。今まで生徒たちからのリクエストに応えて地道に増やしてきた沢山の本。一冊一冊に歴史と想いがあるとなっていて分、それらが失われることは入学して三ヶ月足らずの桂介にとっても悲しいことだった。

（学校の損失もかなりのものになるだろう）

本もガラスも安くはない。大体、今火が消えてもあの理科室の復興となるとかなりの金額が飛ぶのが目に見えるようだ。倭約思考の強い桂介にとって、学校の金だとはいってももったいないとしか言いようがなかった。

そんな事を考えながらも、桂介は炎が起す赤い影に視線も身体も縫い止められたかのように少しも動かすことが出来なかった。

出なければいけない。今すぐこの建物から出て避難するのだ——けれども。

（出たら、今度こそ、逃げ切れないだろう）

無意識に頭に浮かんだ言葉に、桂介は思わず目を瞠った。

そつだ、昔、黄昏の世界で見たのは。あの赤い光ではなくて——。そこまで考えたところで、バン！という音と共に無事だった東側の扉が勢いよく開けられた。

「要——」

乱暴に開け放たれた扉から息も荒くこちらを見ている人影に、ゆっくりと目を向けて桂介は驚いて口を開けた。

「なにを……」

「なにをしてるんだっ」

桂介の言葉に重なるように声を荒げて近づいてきた要に、再度桂介は目を瞠る。

胴着姿のまま肩で荒い息をしている要は、いつもと違って真剣な顔つきでこちらを睨んでいた。いつもへらへらした顔で締まりなく笑っている姿しか見たことがなかったのだが。

（こいつでも怒ることがあるのか）

その表情が意外すぎて、逆に張り詰めていた身体の力が抜けるのを感じた。

「なに怒ってるんだ？」

そう言った顔は、むしろ笑ってしまったかもしれない。案の定、カウンターを飛び越えて入って来た要はその言葉に目を吊り上げた。

「なに暢気なこと言ってるんだよ！こんなところでボサっとしてる暇があつたらさっさと避難しろっ！あほ！」

そう言つて湯気を出しそうな勢いで顔を真っ赤にして怒鳴る要を見ていたら、なお笑いが止まらなくなつて。桂介は大きく息を吐きながらその場に座り込んだ。

「お、おい。どっか怪我でもしてるのか？」

片手で顔を覆つて俯き、堪えきれないように肩を揺らす桂介に、一転して要は不安そうに声を掛ける。その様子にさらにツボを刺激されて、とうとう桂介は腹を抱えて笑い出した。

「おい……」

腹を抱えて床を転げまわる桂介を、さすがに要は憮然とした表情で睨み付けた。また要の機嫌が悪くなり始めているのを感じ、さすがに桂介は笑いをこらえて涙を拭く。

「い、いや、悪い。で、どうしたんだ？」

台詞を間違えたらしい。要の視線がさらに冷たくなった。

「……避難しろつつつてんだよ、避難しろつて」

怒りに震えながら拳を握る要に、桂介は慌てて手を振る。

「わかつてるわかつてる。悪かった」

「じゃあ、行くぞ」

そう言つて差し出された手を、桂介は座ったまま黙つて見つめた。

「……悪い。行けない」

「……なんで」

座り込んだままそう言つた桂介を見て、要は呆然と呟いた。

「もしかして、どこか本当に怪我してるのか？」

「いや」

「じゃあ……」

声を途切れさせた要に、桂介は安心させるように笑みを向ける。

「もうすぐ消防車も来るだろう？ そうすれば火も消えるさ」

答えになっていないその言葉に、要は舌打ちを漏らして首を振つた。図書館に倒れ掛かっている燻った新木に目をやり、その奥でさらに激しさを増しながら火の粉を散らす炎に視線を移して、再度首を振る。

そして、こちらを見上げる桂介の腕をつかんで、ぐいつと無理矢理引きずり上げた。運動神経が良いといっても桂介はパワータイプではなくスピードタイプだ。本格的に剣道に打ち込む要の力には敵うわけもなく、いとも易々と立たされていた。

立ち上がったことで再度目に入って来た窓に視線をやつて身体を少し強張らせた桂介に、要は息をついて引つ張り上げたままの手を引いた。

「……大丈夫。誰も来ないよ」

そう言つた要の言葉に、桂介ははつと振り向いて目を細めた。

「どういう、意味だ」

その言葉は、熱を帯びてきた空気に思つたよりも低く響いた。そ

れに気圧されるように要は気まずそうに目を伏せる。

その様子に、桂介は黒い染みが広がるかのような違和感を覚えていた。

大丈夫、火はまだ来ないよ、ではなく、誰も来ないよ、と言った。
(こいつは、何故、知っているんだ)

自分が、恐れているものを。

帰宅に付き合っている人間ならば、夕刻を避けていることぐらいには気付くだろう。夕日が嫌いなのだと、思うかもしれない。しかし、その理由は誰にもわからないはずだった。

わかるとすれば、それは――。

「お前、何者だ？」

桂介にも、己の声がやけに低く聞こえた。

「2・2」

「2・2」

「毎日毎日の出会いを楽しんでいると、年を取っているってのを忘れちゃうんだよ」

夕刻前に笑顔で家に帰っていった孫が、夜遅くに泣きじゃくりながら再度飛び込んできた時、祖父はそう言いながらその節くれだつた大きな手で小さな孫の頭をなでた。

「で、もっ、病気っ、なん、でしょう？」

しゃっくりを上げながらそう言ってまた泣き出した孫に、やれやれというように首を振りながら、祖父は肩に手を置いて椅子に座るように促した。

まだ暖かい急須からお茶を注いで「ほら飲め」と孫の前に置く。

祖父の入れるお茶は少し苦くて、いつもなら遠慮なく「苦い」と眉を顰めて文句を言う孫が、今日は両手で包み込むように湯飲みを抱えて、赤く泣きはらした目でその水面を見ながらちびちびと飲んでいた。

その様子を見て、祖父の顔に思わず笑みが零れた。

この愛しい幼い孫は、つい先日小学に上がったばかりだった。しかし、両親の仕事の関係から度々大人のレセプション等の社交の場に出ることの多かった孫は、いつの間にかすっかり大人びた表情をするようになっていた。しかし「ませた子供」というには若干の異彩を放っていた。

子供の間で遊んでいても、さりげなく危険な場所から遠ざけるように誘導したり、年長者の喧嘩を影から仲裁したり、さながら保護者のように、そしてそれを気付かれないように立ち振る舞っているようだった。そのことに、本人も何かしらの疑問を抱いていたのだ

ろう。大人の会話に難なく入り込み意見を述べた自分に、「ませた子供」を見慣れているはずの大人ですら困惑と不安が強く入り混じった目を向けることを気付いた孫は、それから最も子供らしく振舞うようになり、その本質の片鱗を見せることをしなくなった。そんな孫の姿に、祖父は心配を禁じえなかったのである。

だから、こうして年相応に泣きじゃくる孫を見ていると、不謹慎ではあるが暖かな笑みが零れてくるのは仕方のないことだった。

「洋子さんが言ったのかい？」

落ち着いてきた孫に、優しく訊ねた。洋子、とは息子の元に嫁いできた聡明で明るい嫁、孫の母親の名前である。

その言葉に、孫は湯飲みに視線を落としたまま小さく首を振った。

「あの放蕩息子か……」

そう言って祖父は溜息をついた。国際犯罪を専門に捜査をしている息子は、一年のほとんどを国外で過ごしていたが、その分父親としての役割はしっかりと果たしていた。

自分の息子の本質にすぐに気付き、彼が何も振舞う必要がないように視線を揃えて助言を与えていた両親だったが、今度ばかりはどうやらそれが裏目に出たようである。

孫は、湯飲みを両手で握りながら、思いつめたような目で緑の水面を見つめ続けていた。

「何も今すぐ死ぬわけじゃない」

その言葉に、孫は俯いたままびくりと肩を震わせた。

彼は、ほとんど正確に『それ』を理解していた。親しい友人の母親、そして第二の母親のようだった祖母、仲良くしてくれた親戚など、生まれて十年と経っていなくても遭遇する機会は少なからずあったし、そこから他人の感情を読み取ることが出来るぐらいには高い理解能力を持っていた。逝く者、残される者、双方の気持ちをわかつているつもりだった。

しかし、と孫は唇を強く噛み締めた。わかっているつもりだった。けれども、ほとんど毎日入り浸って一緒に過ごしている祖父がもう

長くないのだと聞かされた瞬間、信じられないような衝撃を受けたのだった。

わかつているつもりだった。けれども、わかっていなかったのだ。両親の言葉を聞いた途端、悲しみと恐怖が胸を押さえつけ、思わず泣きじゃくりながら家を飛び出していたのだった。

思い出してまた目に涙を浮かべる孫の頭に、祖父は笑いながら手を置いた。

「毎日毎日の出会いを楽しんでると、年を取ってるって気分を忘れちまうんだよ」

そう同じように繰り返して、視線を上げた孫の涙を無骨な指で拭いた。

「毎日毎日ワクワクしてな。いろんな人と会う度に、刺激をもらって元氣が出てくる」

お前に会うのも楽しい、と祖父は嬉しそうに目を細めた。

「やりたいことも沢山ある。挑戦したいこともまだまだ多い。これからどんな新しいことがあるかと思うと、毎日楽しくて仕方がないんだ」

「……でもっ」

顔を歪めた孫の顔を覗き込んで、祖父は笑いながら続けた。

「なに、言っただろう。やりたいことが沢山残っているんだ。最後の最後まで、何一つ諦める気はねえよ」

「……」

黙る孫に、祖父は堪え切れないように声を立てて笑った。

「辛気臭え顔をすんな。楽しんで生きる！でなけりやお前らしく生きろ！俺もそうする」

最後を無駄に強調して胸を張って見せた祖父に、ようやく孫は少し笑みを見せた。

「うん」

「出会いを怖がるな。きつとそいつらはお前を必要としているはず

だから」

「……うん」

「ずっと、俺のことも覚えててくれるだろう？」

「……うんっ」

「ありがとな」

必死で涙を拭く孫に、祖父は目を細めながらわしゃわしゃと頭をなでた。その暖かく力強い感覚に孫は笑顔を向けようと必死で涙を拭い続けたが、しかしそれはなかなか止まらなかった。

祖父が息を引き取ったのはその一カ月後。そして孫が赤い光の世界で『彼ら』と出会うようになったのもその頃からだった。

「2・3」

「2・3」

静かだった。

轟々と音を立てる炎も、熱に耐えかねたガラスが小さく割れる音も、同時に聞こえる野次馬の息を呑んだような悲鳴も、全てが一瞬静まったように感じた。

静寂と共にゆっくりと時間が過ぎていく。自分が発した追求の言葉ですら、もはやずいぶんと前のことのように思われた。

要は、相変わらず目を伏せている。わずかに俯いた顔に、半端に長い髪がかかつて表情がよく見えなかった。けれども、その手は桂介の腕を離すことはしなかった。

「……今は、避難だ」

俯いたまま、要は呟いた。

それでも動かない桂介に、ようやく顔を上げて目を合わせた。

「後で、話すから……」

そう言ってしまうば、もう答えを言ったようなものだった。桂介は唇を噛み締めた。

これで、わかった。彼が何故桂介と一緒に居たがったのか。何故、最初から知り合いのようにこちらを見つめて話しかけてきたのか。何のことはない。最初から『知っていた』のだ。もしかしたら、幼馴染と言っていたのもあながち間違いはなかったのかもしれない。幼い頃、まだ遅くまで外で遊んでいた頃に会った『やつら』の一人だったのだろう。

噛み締めた唇から血が滲んだのか、口の中に鉄の臭いが広がった。じゃあ、今までの関係はなんだったのだ、と思うと息が詰まって仕方がなかった。

「最初から……」

そのつもりだったのか、と。そう言うつもりで顔を上げ、桂介は凍りついた。

落ちたブラインド。割れた窓。炎だけではない、気持ちよく晴れ渡った夕暮れの光に照らされて、その影がこちらを見つめていた。

「桂介？」

要は言葉を途切れさせた桂介を訝しそうに見遣り、視線の先に目をやって、そしてもう一度桂介の方へ顔を向けた。

「なにか、いるのか？」

一言一言確認するように言われた言葉に、桂介はびくつと肩を揺らした。

「……見えないのか？」

お前らは、仲間じゃないのか？と、視線を逸らさずに呆然と呟く。知っている以上、あちら側の者ではないのか、と。

「いや」

桂介の言葉に、要は短く首を横に振って返した。要の目には、荒れた室内と、割れた窓ガラス、そしてその外に広がる混乱しか見えてはいなかった。それでもそちらに視線を向けながら、立ち尽くす桂介を半分隠すように前へ出た。

逃げるか？と、後ろに居る桂介にちらりと視線をやって小さく聞いた。否、とさらに小さく答えが返ってくる――外は今まさに黄昏の世界。もう逃げてても無駄だ、と。

「じゃあ、名を問え」

「……は？」

要が淡々といった言葉に、桂介は思わず間の抜けた声を発してしまった。

「名前はなんだと聞くんだよ」

そういう要の言葉に、桂介はゆっくりと影から視線を外す。温度の上がった空気の中で、顔からは自然と汗が落ちていつていた。し

かし要は前方に視線を固定したままにやりと笑って見せた。

「大丈夫だ。いざとなれば、つれて逃げてやるさ」

握られたままの腕にぐつと力が込められるのを感じて、桂介はゆつくりと目を閉じた。

ずいぶん前から、心臓の鼓動は乱れっぱなしだった——いや、もしかしたら止まっていいのかもれない。ただ、恐怖で胸がつかえるように苦しかった。

たとえあちら側の者でもいい。要が今ここに居ることに苦い安堵を感じている自分に、桂介は思わず口を歪めて嘲笑を漏らした。

ひとつ息を吐いて、再びゆつくりと目を開ける。視線を上げると、まだそこには赤い光に照らされた影が居た。人のようにも思えたが、違うようにも見えた。

逆光のせいか、いくら目を凝らしても顔はわからなかったが、その目が不安げにこちらを見ているように感じた。在るべき場所、帰るべき道を見失ってしまったというように、ただただ立ち尽くしているようだった。

「……名前は？」

眩しい光に目を細めて、その影から視線を逸らさないようにしながらゆつくりと桂介は問うた。影が、一瞬ゆらりと揺れた。

要に掴まれたままの腕から暖かい体温を感じた。次の言葉は自然と口から零れ落ちた。

「——どこへ、帰りたいんだ？」

その言葉と共に、ひゅうつと風が吹いた。影がゆつくりと近づいてくる。

少し身を硬くした桂介の視界に、前を見つめたままの要の横顔が映った。桂介の視線に気付いた要が、ちらつと目線をよこして、大丈夫と言うように口の端を持ち上げてみせる。

それを見て、桂介は自分の腕をつかんだままの要の手に自分の手を乗せて下ろさせた。視線を上げて、要の前に出る。

間近まで来た影が、こちらを見ていた。暗く翳った影と、後ろか

ら照らす霧のような光に、すれ違うほどの距離になっても顔は見えなかった。

ゆっくりと影が手を伸ばした。影で遮られていてもわかる、節くれだった指の、無骨で大きな手。桂介がゆっくりとその手を握ると、すさまじい音と共に風が逆巻くのを感じた。その突風に思わず顔を背けて反対側の手で顔を覆う。高い鐘の音のような水の音が、暗闇の中で一度だけ聞こえたように思った。

——次に目を開けた時には、そこには桂介と要、そして濃い水の匂いを含んだ空気だけが取り残されていた。

「3 - 1」

当たり前のように自分の隣を歩く存在が嬉しかった。
何も諦める必要はないのだ、と背中を押されている気がした。

「3 - 1」

事故があつた、と桂介はポツリと呟いた。

野次馬から少しはなれた駐車場の片隅には、今は青いビニールシートが敷いてあり、爆発と火事で軽症を負った人々とその付き添いが、目の前で行われる消火作業をざわつきながら見ている。

理科室という性質上、規模は大きくなってしまったが、場所がよかったのか幸いにも被害は少なく抑えられたようだった。

隣の理科準備室に居た教師と、たまたま質問に来ていた生徒が爆発の衝撃で怪我を負い病院へと運ばれていたが、あの爆発でも壁は一部しか崩れなかったらしくそこまで重傷ではなかったそうだ。その二人を助けに行った別の教師が火傷を負ったが、これも軽いものようだ、と、捕まえた消防隊員から聞いた。

もしかしたら、一番重症だったのは駐車スペースに止められていた車の持ち主だったかもしれない。たまたま理科室側のスペースに停めていたその車は、見事にフロントガラスにヒビが入っていた。ボンネットも凹んでいるようだ。とうとう車を買ったんだよ！と子供のように生徒たちに自慢していた新人教師が、その車の前でがっ

くりと肩を落としていた。

その他軽傷者は少なからずいたが、桂介のように振動で壁に身体をぶつけたり、爆風で煽られて倒れたりした者だけだった。念の為にと病院へ行く者もいたが、大概は警察からの聞き取りが終わった後は自宅へ直帰するだけという人間が、ぼんやりとシートに座って燻った建物を見ているのだった。

桂介はずれた薄い毛布を肩へ引き上げなおし、手に持っていた力ツプに片手を添えた。湯気の立ち上る暖かいココアは、日が落ちてわずかに冷えてきた空気の中で、小さな安堵感を与えていた。

——あの後、ぼうつと立ち尽くしていた二人だったが、桂介の額から血が滴っていることに気付いた要が慌てて桂介を図書館から引きずり出したのだった。

外に出ると、閉館の札が掛かっていたせいかまさかその中に人が居ると思っていなかった消防隊員に、有無を言わせずこのビニールシートの張られた救護スペースまで連れてこられ、手当てを受けさせられた。最初の爆発の時どこかにぶつけたのだろう、さして痛みも感じなかったから、病院に行くかと聞いてきた消防隊員に桂介は小さく横に頭を振って否と応えたのだった。

「それにしても、いくら閉館の札が掛かっているとはいえ、間近にあつてモロ余波を食らった図書館内に誰がいるかぐらい確かめたいいいよなあ」

不満そうに口を尖らせた要に、桂介は返事を返すこともなくただ消火作業を見ていた。それをちらりと見て、要は口をつぐんで視線を落とした。

近くにあるデパートから入れ替わり立ち替わり野次馬が集まり、一向にいなくなる様子はなかった。それらのざわめきと、サイレンと、放水され続ける水の音が未だある種騒然とした空気を作っていたが、もはやほとんど消えかかった火は、一先ずの落着を示していた。

「……事故があつたんだ」

しばらくして、ポツリと呟いた桂介の言葉に、要は顔を上げた。

桂介は、街特有の明るい夜の闇に浮かび上がっている黒い校舎を見上げたまま言葉を続けた。

「小学に上がったばかりの頃、じいさんが死んで、それからやつらが現れるようになった」

最初は気付かなかつた。黄昏——『誰そ彼』とはよく言ったもので、極限まで傾いた霧のような夕日の光の中で、彼らはただ夕暮れにすれ違う見も知らぬ人だと思っていた。ただ、すれ違う瞬間に感じる、問いかけるような、求めるような、悲しい視線だけが気になっていた。

だから、声を掛けるようになった、と桂介は続けた。小さな子供に笑顔で声を掛けられてあからさまに不快に感じるものはいまいと思つたし、祖父の言葉が耳から離れなかつたのだ——出会いを怖がるな、その人はきっとお前を必要としているはずだから、と。

近くに寄れば、彼らがただの人間ではないことはなんとなくわかつた。黄昏の中、普通の人間ですら顔が見えなくなる時刻とはいえ、いくら近づいてもその影はその容貌も、輪郭ですらはつきりと見えることはなく、ただ影の中に沈みこんでいた。けれど、話しかければ影の中で安堵したように息を漏らしてくれるのが嬉しかった。その後いつの間にかその人はいなくなっていたけれども、数日すればまた違う影が黄昏の中悲しい目でこちらを見ているのだった。

「何度も繰り返し返したけど、別に嫌だとかそうというのはなかった。役に立ててると思えたしな」

しかし、その日は違った。いつもと同じ赤い世界で、相変わらず顔も見えないその影は、何かいつもの人達とは様子が違うように感じられた。同じものだとはわかつたが、何かが違った。

いつもはただただ立っている彼らだったが、今回はこちらに近づいてきた。そして、何も言わぬうちにその影は桂介の手首を掴んで

力任せに引き上げたのだった。

どこかに連れて行こうとするその影に必死で抵抗したものの、子供の力では敵うはずもない大人の握力で手首を握られ、影の中からこちらを見下ろす双眸に暗い悪意を感じた時、本能的な恐怖が身体の中を駆け巡っていくのを感じた。

必死で暴れて、何かの拍子に拘束が緩んだのを感じた瞬間、飛び出すようにそこから逃げ出していた。後ろを振り返る余裕もなく、必死で足を動かし続け――。

いつの間にか真横に現れていた車のフロントの中から、一瞬恐怖に顔を歪めた運転手の表情が見えた。

「……それで？」

そう言った要の声は、わずかに掠れているようだった。

そこで初めて桂介は要のほうに顔を向けて、肩をすくめて苦笑してみせた。

「運転手の兄ちゃんはそのまま電柱へ突っ込んで重傷。まあ、無事退院したみたいだったけど、俺がむやみやたらに首突っ込んだ巻き添えだったからな、悪いことをしたと思ったよ」

「お前は？」

「俺？俺はただの入院」

撥ねられた子供の入院にただもなにもないだろうと要は思ったが、ただ溜息を吐いて口をつぐんだ。こういう場合、本当にわかっていないのだということは短い付き合いの中で学んでいたから、聞いても無駄である。要は質問を変えた。

「その影のことは誰かに言ったのか？」

「いや、あいつらがいる時は決まって誰もいなかったし。こんなことは『ただの子供の虚言』だからな。言っても無駄だろう」

そう言って手に持ったカップからぬるくなったココアを一口口に運んだ。

両親なら、おそらく信じてくれたのだろうと思う。けれども何故

だか話す気にはなれなかった。もしかしたら、祖父になら話せていたのかもしれない、そう思つて桂介は目を細めた。事故について、ただ不注意で飛び出してしまったのだと説明した息子に、両親は何か言いた気な目をしていたけれども、それ以上聞いてくることはなかった。

ただ、それから桂介は夕暮れを避けるようになった。無関係な運転手を巻き込んでしまったという自責の念もあつたが、それ以上にあの時感じた影に対する本能的な恐怖を忘れることが出来なかったからだつた。

桂介は手を握り締めて要の顔を見た。一度は自分の口から放つたあの言葉を、もう一度言わなければならぬ。問わないわけにはいかなかった——お前は何者なのか、と。けれども、どうしても言葉が出てこなかった。

そんな桂介に、要はぽつりと呟いた。

「——お前は、『道』を持ってるんだよ」

その言葉に、思わず「は？」と桂介が眉を寄せる。それにかまわず要は言葉を続けた。

「誰だつていつの間にか道を見失う時がある」

行くべき道も、帰るべき道すらわからない。それまでただまっすぐに歩いてきたはずだったのに、いつの間にか知らぬ場所に放り出されていたように。ふと立ち止まると誰もいなくて、己がどこへ行くはずだつたかとも思い出せない。

「お前は、道を持っている。……と言うと少し違うか。道を見失つて彷徨っている者の、本当に望む帰る道への扉を持ってるんだ」

要は桂介の胸をトンッと叩いた。

「そこにある水鏡に映る月に手を伸ばすと、本当の月に帰れるみたいに。……黄昏は世界の境界が曖昧になる時間だ。いろんな世界が、少しずつ重なり合う」

だから、と言つて目を伏せた要に、桂介は息を吐いて訊ねた。

「……お前も？」

ああ、と要は小さく答えた。視線を上げた要の目を、桂介もゆくりと見返した。

「帰りたいのか？」

どこかへ……。そう言つて覗き込んでくる蒼い双眸を見つめながら、要はふつと笑つて立ち上がった。

「……さあな。——じゃあ、帰るか」

そう言いながら、大袈裟に巻かれた桂介の頭の包帯をパンッと叩く。

「……つてえな！俺は怪我人だぞ！大体、警察は待たなくていいのかよ？」

「もう遅いし、連絡先も言つてあるから大丈夫でしょ。怪我人さんは、送つていつてやりますよ」

その言葉に、桂介は一瞬目を瞞つたが、すぐに苦々しく表情を歪めた。

「大体、なんなんだよお前。結局意味わかんねえよ」

「うわー、わかんないのー？あほだなー」

「……おーまーえーなー」

「幼馴染だつて、おさななじみ」

「んなわけあるか！」

ネオンサインに照らされた明るい闇の中、無駄に騒々しく喚き散らしながら去っていく二人の姿を、数人の野次馬たちが目を丸くしながら見送っていた。

「3 - 2」

「3 - 2」

結局、あの火事の原因はわからずじまだった。

生徒の間では、先週起きたパソコン室での小火騒ぎ同様、生徒の誰かが腹立ち紛れに放火したのではないかという噂が立ったが、確たる証拠もない上に前回の犯人もわかっていなかったということもあり、結局うやむやのまま興味が消えると同時に噂も聞こえなくなつた。

ただ、放火されたにせよ、その後の爆発と大火があまりにも異常だったため、その後もしばらく警察は動いていたようだった。しかし結局何の痕跡も証拠も見られなかったために、捜査は打ち切りとなったそうだ。最終的に、放火された火が保管されていた薬品に引火したのだろつということと世間の評価は落着し、何事もなかったかのように平穏な日常に戻つていった。

「こんにちわ」

図書館の扉を開けながら桂介が言うと、いつものようにカウンタ―に座つていた角川が静かに笑いながら手を上げた。

「やあ、来たね。こんにちわ」

そう言つてこちらを見る角川の隣には、私服姿の中学生らしき少年がにっこりと笑いながら立っていた。こんにちわ、と返された言葉に、桂介も笑顔で会釈を返す。

「依頼ですか？」

「いや、司書室は空いてるよ。今日はもう予定はないから好きに使つていい」

いつもと変わらぬやり取りに、桂介は思わず小さく笑みを漏らし

た。

図書館は、建物自体に損傷がなかったこともあり、あの日から二週間もしないうちに元の姿を取り戻していた。

それでも二週間もかかったのは、図書館という性質上仕方のないことだった。北側の割れたガラスは次の日には新しく変えられていたが、大量に崩れ落ちた資料と本の分類と再整理は想像以上の重労働だったのである。

この十日間、昼休み放課後と休むまもなく働かせ続けられていた各クラスの図書委員は、昨日やつと行われた作業終了の宣言と共に開放され、今日は久々に静かな図書館が戻ってきていた。

「君が高里くんでしょ？」

カウンターに寄ったところで、角川の隣に居た人物に笑顔で声を掛けられ、「はぁ」と桂介は困惑した表情を浮かべた。

「どこかでお会いしましたっけ？」

「いや。でも直ちゃんからいつも聞いてるよ。かわいい助手が出来たって」

そういつて少年は嬉しそうに笑う。その表情を見て桂介はさらに困惑して角川を見た。自分より年下の人間が校内にいる理由もわからなかったし、『助手』という言葉にも引かなかった。いつの間になんかそういうことになっていたのだろうか。

さらに、『直ちゃん』なる人物が目の前にいる我が校の生きた七不思議、角川のことを指している事に気付き、思わず激しく咽てしまった。

そんな桂介の様子にぶつと男は噴き出した。角川はやれやれといった風に肩をすくめてみせる。

「こいつは東郷由紀だ。私の弟分みたいなものだと考えてくれればいい」

「弟分って……同じ年なんだから、そういう言い方ないでしょ？」

（と、年上かよ……）

頬を膨らませて見せる東郷に、桂介は思わず啞然としてしまった。

小柄な身長はもとより、ころころ変わる表情や明らかに童顔な顔つきは、とても同じ年代とは思えなかった。背の高い小学生と言われたほうがまだしっくりくる気がする。

「それで？今日は相方は？」

文句を言い続ける東郷を無視して角川は桂介に顔を向けた。いつもと変わらぬやり取りに、桂介はもう一度ふつと笑った。

「今日は部活休みらしいんで、もうすぐ迎えに来ると思います。俺も、今日は鍵を返しに來ただけなんです」

この間返し忘れていたので、と言って桂介はポケットから鍵を取り出した。

「すまないね、留守の間にそんな怪我までさせて」

そついう角川の視線に気付いて、桂介はこめかみに手を当てた。右のこめかみ、ちょうど眉の上の辺りには、まだかさぶたに覆われた傷が残っていた。

それを触りながら思わず口元に笑みを浮かべ、いえ、と桂介は答えた。

「けーすけー！」

ボタンつと大きな音を立てて扉が開き、騒々しく要が入って來た。一気に降り注ぐ図書室常連達からの冷やかな視線を浴びて、ピタツと動きを止めて頭を下げながら抜き足差し足でカウンターへと向かってくる。それを笑いを堪えて眺めながら、桂介は角川に鍵を渡した。

「じゃあ、今日はこれで」

「ああ。また明日」

会釈を二人に返して、桂介は扉に向けて歩き出した。
初夏特有の晴れ晴れとした一日が終わろうとしていた。

「エピソード」

世界は赤く乾ききっていた。

目に映る風景は、全く知らない世界のように色や形をなくし、ただ赤い光と黒い影のコントラストを成している。

（ここは、どこだろう）

霞がかった頭でぼんやりと思った。自分はどこへ行くつもりだったのだろう——どこへ帰ろうと思っていたのだろう。

今まで手をつないで道を示してくれた人は、もういない。

ただただ悲しかった。けれど、乾ききった世界で涙も体内で乾ききったかのように、その目から一滴も流れることはなかった。泣くことも動くことも出来ず、ただただ一人、赤い世界で立ち尽くしていた。

「——どうしたの？お兄さん」

突然聞こえた高い水の音のような声に、彼は思わず目を睜った。いつの間にか、目の前で小さな少年がこちらを覗きこんでいた。

小さい、といっても、年は彼とさほど変わらないように思えた。目の前にいる少年の目は幼いにしてはあまりにも大人びた目をしていたし、なおのこと同じ年ぐらいなのではないかと思われた。彼は周り比べて背が高く、対する少年はかなり小柄だったから、目の前の少年からすれば年上に見えたのだろうか。

目を睜ったまま黙り込んでいる彼に、少年は首をかしげて再度声を掛けた。

「道に、迷ったの？」

ゆっくりと言われた言葉に、彼は小さくうなずいた。先ほどまで

の乾いた世界に、少しずつ水が染みこんでいくような気がして、深く息を吐いた。

その様子に、少年は嬉しそうに目を細めた。一緒に探してあげよ、といって手を差し出す。

彼は少年と差し出された手を交互に見つめた。ほら、と再度少年が手を揺らしてみせる。こちらを覗きこんでくる蒼い双眸を見てみると、何故だか自然と心が落ちていくのを感じた。

差し出された手を、ゆっくりと握った。視界の向こうで夕日が沈むと共に、静かな夜の世界が訪れた。

> END <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6577l/>

帰る道

2010年10月8日14時49分発行